第 439 回「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

『幅の広さ ＆ 弾力性に富む ＆ 洞察と識見のひらめき』～『教育の真髄』～

2026 年 11 月 3 日（文化の日）日本教育会館に於いての【第 23 回南原繁（1889―1974）シンポジウム『南原繁と『文化首都構想』】に出席する。

本シンポジウムでは【南原繁の提起した『文化首都構想』を中心的主題として、その意義を再検討することを目的とする。 南原繁の構想は、単なる都市計画論に とどまるものではなく、精神的価値の創造と共有の場としての文化、ならびにそれを担う大学の役割を視野に収めた、総合的な公共性の理念として理解されるべきものである。 この『文化首都構想』を思想史的に検討するとともに、戦後日本における文化国家論・教育改革・平和思想との連関を踏まえながら、その現代的意義を再定位することを試みたい。 基調講演には、吉見俊哉氏（東京大学名誉教授）を迎える。 パネル・ディスカッションでは、南原繁研究会の 3 名の小川智瑞恵氏（ぐんま未来大学短期大学部教授）＆ 大藪敏宏氏（元富山国際大学教授）＆ 金子真夕氏（公益財団法人中東調査会上席研究員）】とチラシには紹介されている。

2004 年にスタートした南原繁研究会 【初代代表、鴨下重彦 先生(1934―2011)、東京大学名誉教授、国立国際医療センター名誉総長）、第２代代表、加藤 節 先生(成蹊大学名誉教授)】の３代目の代表を、筆者は、2019 年、南原繁（1889―1974） 生誕 130 周年を祝し、仰せつかった。 筆者の恩師は、南原繁が、戦後最初の東大総長のときの医学部の学生であった。 『スケールの大きい、愛情豊かな人物だった』と、南原繁の話を よく聞いたものである。

南原繁は『高度な専門知識と幅広い教養』を兼ね備えている人物であり、【『視野狭窄にならず、複眼の思考を持ち、教養を深め、時代を読む『具眼の士』】である。『役割意識 ＆ 使命感』の自覚へと導く。 『練られた品性 と 綽々たる余裕』は『教育の真髄』である。 『ビジョン』は人知・思いを超えて進展することを痛感する日々である。

『時代を動かすリーダーの清々しい胆力』としての『人間の知恵と洞察とともに、自由にして勇気ある行動』の持ち主であった南原繁が 思い出される 今日この頃である。 これは『時代を超えて、時代を愛する 南原繁研究会の原点』であろう。

『１．幅の広さ ２．弾力性に富む ３．洞察と識見のひらめき』の訓練でもある。